ごんぎつね（やりとりの感じを出して）

連続している会話文は、やりとりしている感じを出して読むことが大切です。

物語「ごんぎつね」には、連続している会話文の個所が二か所あります。
会話文は、話し手の考えや気持ちを押し出して読みましょう。

はじめの場面は、兵十が加助に「とっても不思議な、こんなことがあるんだ。」と話しかけています。
それに対して加助は「へんなこともあるもんだな。不思議だね」と答えています。
兵十も加助も、ともに不思議な気持ちになっています。二人の不思議な気持ちを押し出して読みます。

兵十「そうそう、なあ加助。」
加助「ああん。」
兵十「おれあ、このごろ、とても、不思議なことがあるんだ。」
加助「何が。」
兵十「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに
　くりや松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」
加助「ふう、だれが。」
兵十「それが分からんのだよ。おれの知らんうちに、
　置いていくんだ。」
加助「ほんとかい。」
兵十「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見にこいよ。
　そのくりを見せてやるよ。」
加助「へえ、へんなこともあるもんだなあ。」

次の場面は、加助が兵十の質問に答えています。それは神様のしわざだ、と答えています。
加助は自信をもって語っているようです。兵十は、半信半疑、びっくりして受け止め、十分に納得していません。そうかなあ、あいまいな気持ちで返事をしています。

加助「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」
兵十「えっ。」
と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。
加助「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃぁ、
　人間じゃない、神様だ。神様が、おまえがたったひとりに
　なったのを、あわれに思わしゃって、いろんなものをめぐんで
　くださるんだよ。」
兵十「そうかなあ。」
加助「そうだとも、だから、毎日、神様にお礼をいうがいいよ。」
兵十「うん。」